

発行：平成23年11月 横浜市立市民病院 患者総合相談室

リハビリテーション科長

横井 剛(よこい つよし)

専 門： リハビリテーション一般、脳卒中

はじめに

現在当科では、主に入院患者さんに対して急性期のリハビリテーションを行っていますが、外来では障害のある患者さんへの一般診療に加え、急性期の治療を終了した後の患者さんのリハビリテーションや義肢・装具などの作製を行っています。今回は、現在当科で行っている痙縮に対するボツリヌス治療についてお話ししたいと思います。

痙縮とその治療について

痙縮とは、脳や脊髄などが障害されたときに生じる症状のひとつであり、脳血管障害、脳外傷、無酸素脳症、脊髄損傷、多発性硬化症などさまざまな疾患が原因で見られます。一般的にみられる所見としては筋緊張の増加、腱反射の亢進、クローヌスなどがあります。

痙縮自体は必ずしも全て悪いものではなく、痙縮を下肢の支持性を増加させることに利用して立位、歩行につなげている場合もあります。しかし通常は痙縮により問題が生じることが多いです。介護時の問題としては更衣や手指の衛生面、移乗動作、そして動作時の問題点としては上肢ではリーチの制限、下肢では歩行時に足底接地が不十分で不安定になったりすることなどがあげられます。

一般的な痙縮の治療としては、抗痙縮薬の内服、ストレッチングなどの理学療法、物理療法、神経ブロック、装具療法、手術療法（腱延長術、選択的後根切断術）、バクロフェン髄注療法などがあります。そして、これらの治療法の中に新しく入ったものとしてボツリヌスによる治療があります。

ボツリヌス治療について

ボツリヌス治療はボツリヌス菌により産生される菌体外毒素（ボツリヌス毒素）を使用し、毒素が神経筋接合部で神経筋伝達を阻害し筋収縮を抑制する性質を利用して、痙縮のある筋に薬剤を注射し痙縮を抑える治療法です。薬の効果は数日後より出現し、約2週間で安定します。そして約3ヶ月程度効果は持続し、その後徐々に減弱していきます。効果が少なくなった場合には、再度注射をすることができます。本治療の特徴は、局所的に痙縮を押さえることが可能で、作用は可逆的でまた注射の手技自体も簡便であることです。

現在当科では痙縮に対するボツリヌス治療を行っています。治療については診察で全身の評価・痙縮の評価をしたうえで決定します。治療する場合は具体的な治療目標を設定し、抗痙縮薬、理学療法、物理療法、装具療法などと組み合わせて行っています。

外来のご案内

リハビリテーション科外来は毎日午前に行っていますが、予約制ですのでご予約の上お越しください。また、装具外来については毎週月曜日15:00からになります。こちらも予約制ですので、ご予約のうえお越しください。なお、当日のご予約は受付しておりません。

【電話番号】 045-331-1961(代表) 内線3110

【受付時間】 月曜 8:30~16:00、火~金曜 8:30~12:00

最新の外来担当医師一覧は、当院ホームページをご覧ください。また、診療科ごとの担当医師一覧は、当院ホームページの各診療科のページをご覧ください(下記参照)。

地域の先生方からの症例についてのご相談は、直接お電話にてお受けいたします。当院代表番号へご連絡ください。

横浜市立市民病院

住 所: 〒240-8555 横浜市保土ヶ谷区岡沢町56番地

電 話: 045-331-1961(代表)

当院ホームページ : <http://www.city.yokohama.lg.jp/byoin/s-byouin/>

各診療科のご案内: <http://www.city.yokohama.lg.jp/byoin/s-byouin/shinryobumon/>

最新の外来担当医師一

覧: <http://www.city.yokohama.lg.jp/byoin/s-byouin/shinryobumon/pdf-shinryobumon/doctor.pdf>